

主体的言語化能力の育成ー思考力を問う作問を通して

田園調布学園中部・高等部 橋本 彬生

実践背景

【実践者の課題意識】

■従来の国語(現代文・古典)の授業において、生徒の学習が定期考査で点数をとるための表面的な文章の読解に留まっている。単なる知識問題であれば「覚えれば解ける」が、近年の大学入試で出題されるようないわゆる「思考力を問う設問」に弱みがある。複数テキストの内容を結び付ける同一文章内を様々な視点から分析したりする経験が少ない。

■生徒の発想の例...ネガティブな学習観「結果志向・暗記志向」
例①)現代文では...ワークシートや教科書の設問の解答をなんとなく記憶していれば部分点はとれる。

例②)古文・漢文では...定期考査範囲の文章の品詞分解や現代語訳を丸暗記すると点数がとれる(=模試など**初見の文章には対応できない**)。

具体的な実践内容とねらい

【実践者の仮説・ねらい】

- ①文章理解の質を高め、思考力を問う設問への対応力を磨くために、「**問題を解くためにどのような力が求められているか***」を解く側である生徒自身が理解する必要がある。作問者側の視点に立つ(=「何を」「どう問うのか」を自身で設定してみる)ことでそれを学習できる。
- ②上記「*」を活動の中で言語化し、他者と協働することで学習観(「実践背景」の生徒の発想例にあるような)が転換していく。

取得データおよび検証方法

- ①国語の学習に対する意識の変化【アンケート調査】
実践の有無による成績の変化【定期考査、模試の成績比較】
- ②授業中の発言、作問の質などの変化
なお、昨年度も同様の実践を高等部1年「言語文化」の授業で実施している。同実践を2年連続で受講したグループ(実験群N=16)と、2年連続で受講していないグループ(統制群N=36)を比較した結果を抜粋して以下に示す。

具体的な実践内容・実践方法

- 対象学年: 高等部2年 「論理国語」および「古典探究」
- クラス数および対象生徒人数: 1クラス・39名
- クラスの特性: 文系・学年上位
- 実践期間: 2024年度(1年間)、1~2学期
※昨年度から継続して実践の対象となっている生徒は20名。
- 実施した単元:
 - I. 論理国語: 1学期: 「動物の信号と人間の言語」(評論文)
 - II. 古典探究: 1学期: 「推敲」(漢文)
 - III. 古典探究: 2学期: 「背水之陣」(漢文)

- 進め方: 各単元とも、
 - ①本文の内容確認(教員主導) → ①個人での作問活動
 - ②グループでの作問活動 → ③クラス全体での共有という流れを原則とした。以下に単元ごとの活動の特色を示す。

【I. 論理国語(評論文)...「ジグソー作問」】

- ①個人での作問時、設問は「内容一致型の選択肢問題」と形式を指定し、作問範囲を本文の**特定の意味段落に限定**。
- ②5~6人のグループで設問・模範解答を吟味し、整える。
 - ▶作問範囲が異なる生徒同士でグループを作り、**個人で作成した選択肢をグループに持ち寄ることで本文全体の内容を問える**選択肢問題ができる。
 - ▶模範解答・解説を作成。解答根拠を明示。
- ③他グループが作成した設問を解く。
 - ▶自分たちで選択肢や解説を作成するに加え、様々な選択肢を読んでその内容を吟味することで、本文全体の内容理解が深まる。

【II. 古典探究(漢文「推敲」)...「予想問題作成」】

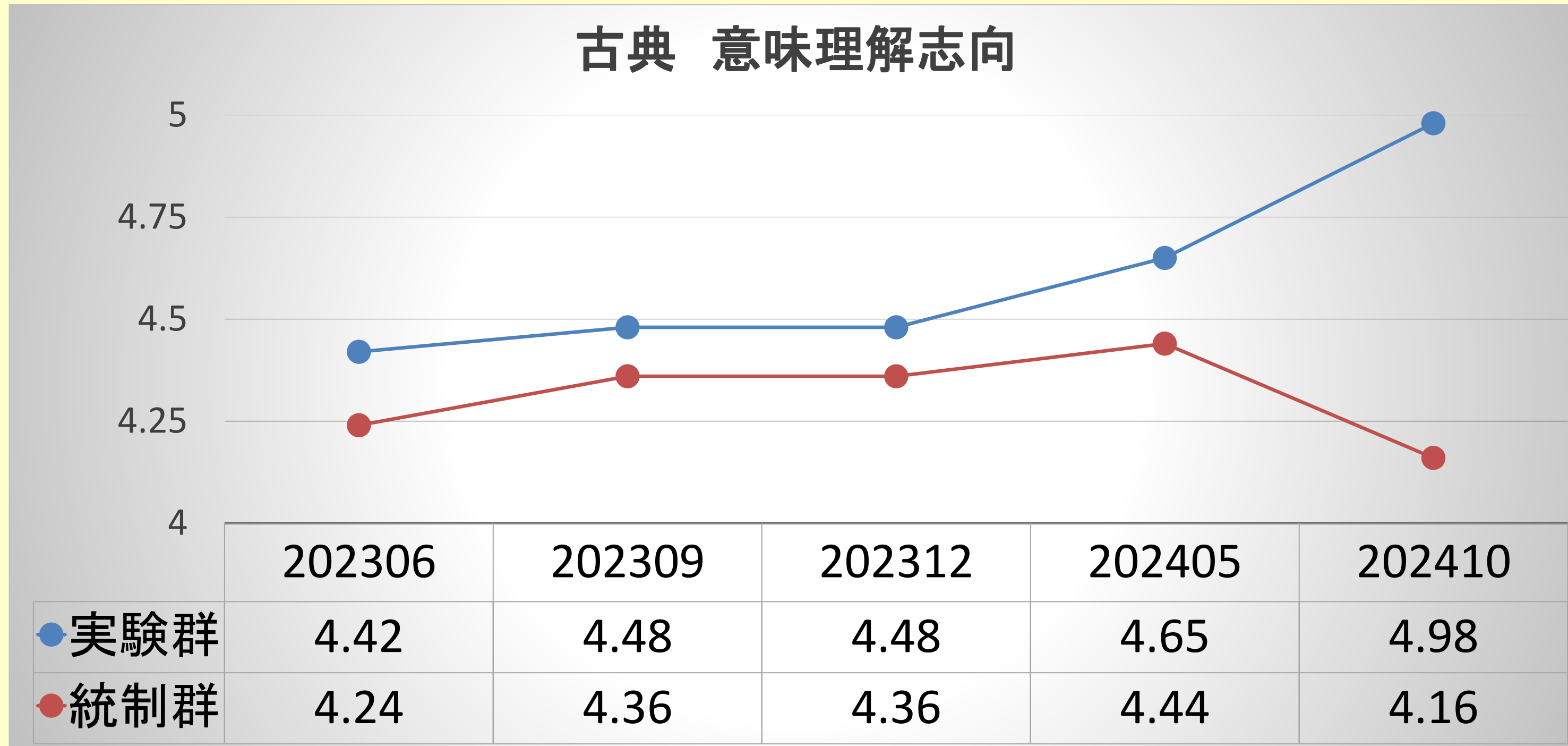
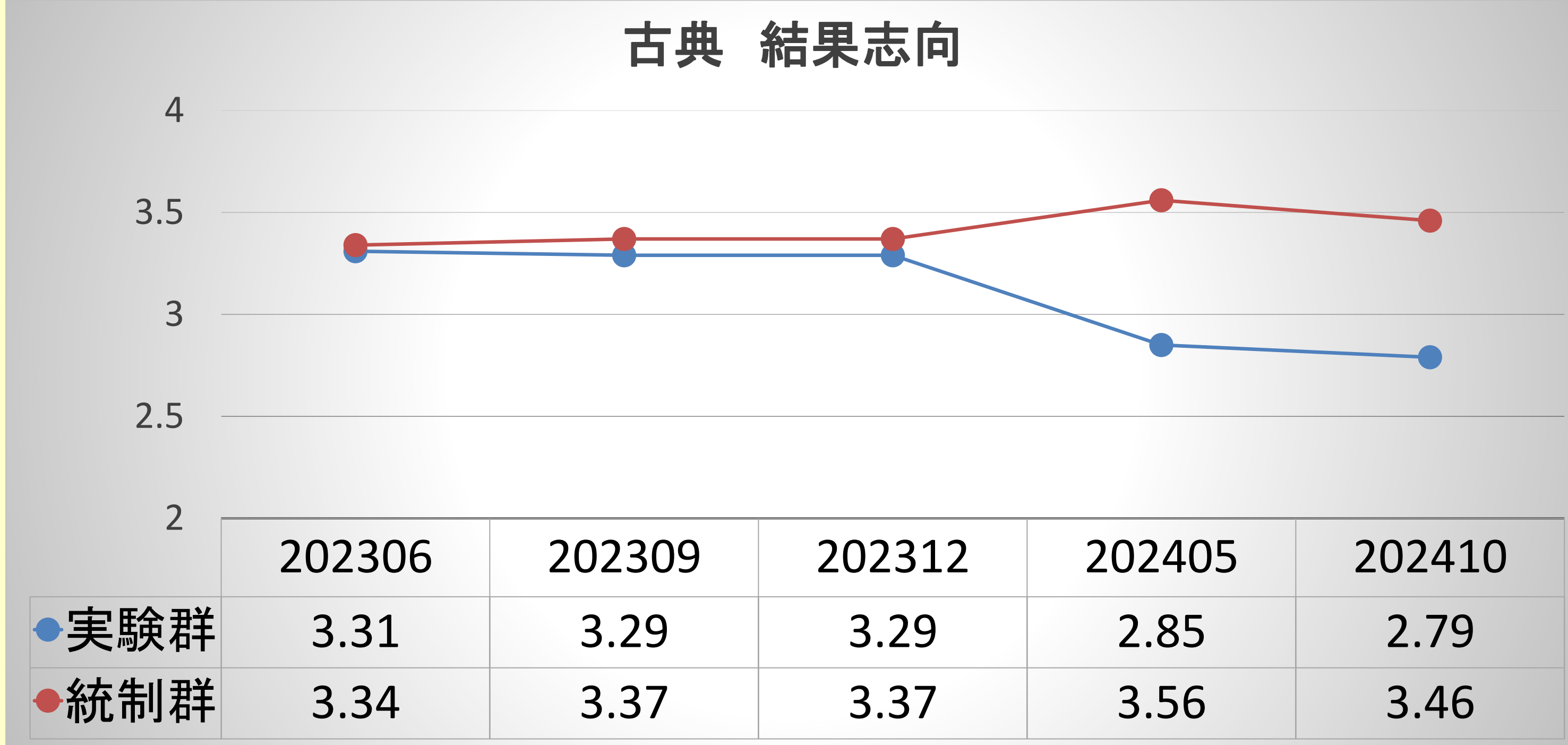
- ①個人での作問時には、「知識問題と思考力を問う問題を最低1題ずつ含めること」と指定。
- ②グループで議論し、そのグループで**「ベストな1題」**を作成する。
 - ▶設問の形式に制約は設けない。ただし、「他のグループでは考えつかないような(内容がかぶらないような)ものがよい」と指示。これにより(単に一つの知識のみで解ける)単純な問題は出づらくなる。
- ③教員がクラス全体でそれぞれのグループが作成した問題を集約、設問の順序や体裁を整える。
 - ▶いわゆる定期考査の「大問一つぶん」に相当する問題が完成。他クラスの生徒も見られるようにして、学年全体で同単元の理解を深めた。

【III. 古典探究(漢文「背水之陣」)...「思考力を問う会話文問題作成」】

- ②グループでの作問時には、「単なる知識だけでは解けない・**会話文形式の問題**」と形式を指定。
 - ▶工夫したポイント、「問うている力」を明示させる。
 - ▶結果として関連資料を自ら調べ、引用して複数テキストの作問を行った班もあり。
- ③クラス全体で各グループの設問を解く。
 - ▶それぞれのグループにこだわった点、また他グループの設問の良かった点などを言語化させる。

結果...実験群と統制群の比較から

- ①ポジティブな変化が見られたもの(有意差・優位傾向):
 - ・古典「プランニング」、「結果志向」、「意味理解志向」「暗記志向」
 - ・現代文「結果志向」「暗記志向」
- ②現代文分野では大きな学習観の変容とまでは至っていない。



成果と今後の課題

- 現代文・古典ともに**「結果志向」にポジティブな変化**が生まれている。作問活動を通じて、「その試験で良い点数がとれさえすればよい」という意識が減り、設問がどのような視点でつくられ、それゆえにどのような知識や考え方が必要なのかに意識が向いてきたのだと考えられる。
- また、「暗記志向」と古典の「意味理解志向」の変化からは、「知識を単にインプットするだけでなく、それぞれの事項の意味内容を理解し、知識の連関を捉えることが肝要である」という意識が芽生えてきたといえるか。
- 授業内での実践・活動の回数は限られてしまう中で、今後は生徒の自学に対するアプローチをどのようにできるかを意識して実践の内容を考えていきたい(特に現代文分野での実践について)。